

二〇二〇年六月二六日

骨壺にほのかな温み沙羅の花
吊橋に腰引けてをる夏帽子
峰雲や千手拵げてご神木
あぢさゐ苑課外授業の声弾む
風涼し 大き魚板の座禅堂

ひのと
智恵子
やよい
菜々
なつき

二〇二〇年六月二五日

花合歓に音なく雨の降りつつく
菅笠の大師の像に沙羅の雨
一両車窓全開や青田風
山滴る麓に理学部演習林
旅枕寝がへり幾度明易し
梅雨晴の夜空に合はす星座盤

はく子
うつぎ
かかし
菜々
ぽんこ
ひのと

二〇二〇年六月二四日

参燈の手摺に蠅の手を合はせ
身構へし守宮の喉の息遣ひ
叡電の青時雨抜け鞍馬へと
山滴るあまたの古刹懷に
譲り合ふ茶屋の縁台五月闇
家敷門番人のごと鬼あざみ

やよい
宏虎
もとこ
たか子
愛正
智恵子

二〇二〇年六月二三日

大空の星に紛れし蛍かな
おろしたてエプロン涼し朝支度
袈裟懸けに河面掠めて夏燕
腹這ひでルーペ片手に野に遊ぶ

たか子
こすもす
ぽんこ
みきお

二〇二〇年六月二二日

日矢の射す雨戸の隙間明易し
山泊り蛍飛ぶ夜を寝惜しみぬ
五月雨の水輪に大き鯉の口
折り鶴に息吹き込むや沖縄忌

満天
みづき
たか子
ひのと

二〇二〇年六月二一日

一日のおまけのやうな梅雨夕焼
はや夏至と思ふ厨の夕ごろ
青田波風の甘さの水匂ふ
児ら去りて音の整ふ夏の川
ピーラーをあてるときゆつと鳴く茄子
梅雨夕焼庭仕の脚立そのままに

うつぎ
素秀
宏虎
たか子
明日香
うつぎ

二〇二〇年六月二〇日

遠山の透けてみどりの金魚玉
一丘のなぞへ埋めて七変化
梅雨晴れ間畑草引かな肥遣らな
青梅雨やもつれし糸のほぐれけり
よだれ掛け涼し双子のお食ひ初め
帆立貝口を開けば猫パンチ

素秀
はく子
菜々
せいじ
こすもす
智恵子

毎日句会みのる選・二〇二〇年六月二八日